コメニウスの人間論 —実行能力を中心にして—
J. A. Comenius' Writings on Human Nature:On his Theory of "Facultates Operativae" (Active Power)

太田　光一
OTA, Koichi

1. はじめに

コメニウス（Johannes Amos Comenius（1592-1670）。出身地のチェコの表記ではコメンスキー Jan Amos Komenský）は 17 世紀の教育学者として、主要著書『大教授学』と『世界図絵』と共に、教育学の分野ではよく知られている。すでに戦前から、コメニウスは教育学にとどまらず「広い深い社会改良思想体系の持ち主」だと指摘されてきた（佐々木 1939）(1)。とりわけ、20 世紀になってから彼の膨大な遺稿が発見され、それが Consultatio Catholica の題で印刷公刊されてからは、国際的なコメニウス研究は広がりを見せた（De Rerum Humanarum Emendatione Consultatio Catholica, vol. 1, 2. Praha, 1966。『人間に関わる事柄の改善についての総合的熟議』以下『熟議』と略称し、この書からの引用は本文中に巻数と頁数を示す）。

『熟議』は世界の学問と宗教と政治の総合的な改善を目指し、その三分野のそれぞれに国際機関を設立し、その上に世界全体の総会を定期的に開催して代表が集まって熟慮議論しようという提案である。コメニウスは生前にこの著作が七部構成になると予告し、最初の二部だけをごく少数部印刷していたのだが、全体は未完に終わったと長らく信じられていた (2)。

『熟議』では教育と学校の改善は学問の改革の一部として位置づけられているにすぎない。『熟議』の公刊から 50 年が経過したが、日本の教育学の概説書には必ずといってよいほどコメニウスが紹介されているものの、『熟議』に踏み込んだ紹介はまだほとんどない (3)。また哲学、政治学、宗教学などの研究分野でも『熟議』に言及したものは寡聞にして見受けられない。

2.『熟議』の構成

全七部からなる『熟議』の全体像を明らかにするのはこの論文ではとても不可能であるから、本稿では彼の人間論の特徴を、人間の魂の本来的な働き（能力）に限定して明らかにしたい。彼の特徴的な人間観は、理性や意志だけでなく実行能力が誰にも共通に生得的に備わっているということである。人間は良いことを認識したらそれを実行しようと決意し、決意しただけでなくそれを実際に実行に移さざるをえない存在なのである。そして改革を実現すべき領域は、学問だけではなく宗教や政治全般に及んでいるということである。

考察に入る前に、どうしても『熟議』の構成を簡単に紹介しておかねばならない。まず最初にヨーロッパの学識者、宗教者、政治権力者に充てたやや長い序文が置かれている。

その後の各部にはすべて、ギリシャ語の πᾶν すべてのこと）に由来する PAN という接頭辞が付けられた、ギリシャ語由来のコメニウスが創作したと思われるタイトルがつけられている。日本語に翻訳するのが難しいので、あえてカタカナ表記のままにしておきたい。

第一部はパンエゲルシア（Panegersia）。ἐγείρω は「目を覚まさせる」という意味であり、目を覚まして世界が堕落している現状を直視しようという呼びかけである。ここでは学問と宗教と政治の分裂と対立という嘆かわしい現状が批判される。

第二部はパンアウギア（Panaugia）。αὐγή は「光」であり、直訳すれば「普遍的光」となる。英語の enlightenment、フランス語の lumière、ドイツ語の Aufklärung はいずれも「啓蒙」と日本語訳されているが元の意味は「光」だ。ここでは堕落した現状を明るく照らして改善するための可能性が述べられる。そのためには、実行の主体である人間の心の働きを検討することが必要であり、この第二部はコメニウスの認識論となっている。

第三部はパンソフィア（Pansophia）。σοφίᾱ は「知恵」である。（古代ギリシャ語の発音通りではソフィアではなくソピアーなのだろうが、慣例に従って「ソフィア」と表記しておく。）実は『熟議』の中ではこの第三部の分量が最も多く、全体の四割を占める。

パンソフィアはさらに八つの世界に細分されている。世界を解明するカテゴリー論から始まり、自然界、人間界、技術界、道徳界、霊魂界までも網羅した、一種の百科全書となっている。自然界の中では何と言っても人間の身体と精神の考察が中心である。技術界では、鉱物植物動物を扱う技術の他に、人間に関する技術が論じられ、衣食住の技術や医術の他に、教え学ぶ技術や弁論術についても扱われる。道徳界では、人間の思慮の働きが考察され、倫理学や家政学が検討されると同時に、学校や政治形態についても考察される。そしてもっとも大きな部分を占めているのは霊魂界、すなわち神、宗教、教会の検討である。

第四部はパンパイデイア（Pampaedia）。ギリシャ語の παιδείᾱ は子どもの教育のことで、ここでは誕生前から死に至るまでの人間の教育課題が詳述される。今日の生涯教育の先駆である（太田 2015）。

第五部はパングロッティア（Panglottia）。γλῶττα は舌・言語・言葉という意味であり、ラテン語に代わる新しい言語の創造について提案される。コメニウスによれば、世界を混乱させている原因の一つは世界共通語が存在しないということであり、ラテン語に代わるもっと単純で誰もがすぐ習得できる言語の必要性が強調される。コメニウスは実際に新しい単語や文章を作成する見本までも提案している。普遍語は後世のライプニッツやザメンホフが追求したことでもあり、この部だけでも検討に値しよう。

第六部はパンオルトシア（Panorthosia）。ギリシャ語の ὀρθός は真直ぐ、正しい、というのが原義で、直訳すれば「正義」あるいは「真正」となるのだろうが、コメニウス自身が Universalis Reformatio と言い換えているので、「普遍的改革」という意味になる。ここでは、学識者と政治家と宗教者がそれぞれ世界会議を持つと同時に、世界中の指導者が一堂に会する世界総会が提案されている。そのためユネスコはコメニウスを国連の先駆者と見なしているのである（U.N.E.S.C.O1957：15）(4)。

最後の第七部はパンヌテシア（Pannuthesia）。ギリシャ語の νουθεσίᾱ が励ます、忠告するという意味なので「普遍的勧奨」と訳せるだろう。

その七部作の後に付録としてかなりの分量の「辞典（Lexicon Reale Pansophicum）」が付けられているが、未完成のままである。

3. 魂の構成—理性、意志、実行能力

コメニウスは第一部のパンエゲルシアで、獣に対する人間の優位性は何かを検討する。人間が獣より優っているのは肉体ではなく魂であり、人間の魂の固有の働き（facultas。以下、能力と訳す）は理性（ratio）あるいは知性（intellctus）(5)、意志（voluntas）、実行能力（facultates operativae）だという。

「他の可視的な被造物と違って、人間の魂には生きた神の生きた似姿が内在している。それは、事物の認識すなわち理性、事物の自由裁量すなわち意志、事物への影響力の行使すなわち何にでも広がっていく実行能力、これら三つから成り立っている。存在するものは何でも人間の知性に任されている。善であるものは何でも知性の選択に従属している。可能であるものは何でも実行能力に割り当てられている。(1. 29)」

この第三の能力を、コメニウスはこの章では仕事を遂行する諸能力（facultates operum exsequutrices)、物事を動かす諸能力（res agendi facultates)、仕事の際の動因（impetum in opera）などと言い換え、また別な所では単に力（vires）などと様々に説明しているが、多くの場合は修飾語を付けずに諸能力（facultates）と表現している。また「私たちの魂は、理解し、欲し、実行するという三つの能力から成り立っている（1. 85)」と述べているから、能力を広くとらえれば理性も意志も含むのだが、狭くとらえれば第三の実行能力だけを指すということになろう。狭い方をただ「能力」と直訳すると意味が通じないので、「実行能力」と訳しておく。

人間の魂をコメニウスのように三分割することは、決して一般的とは思えない。同じ 17 世紀のベーコンもデカルトも、人間の魂の働きを理性と意志の二つに限定しているのである [(6)]。

コメニウス自身にとっても、このような三分割は当初から確定していたわけではなかったと推測される。コメニウスの最も成功した著書である『世界図絵』(1658）では「人間の魂（Anima）は三つから構成されている。第一は精神あるいは知性、第二は意志、第三は Animus である」と説明され、第三の働きの術語に animus を当てている（J.A.Comenius1970：122）[(7)]。そして「Animus は選ばれた善を追求し、拒否された悪から逃げる」とされているから、実行能力を指していることは明らかだが、animus という名称は何とも分かりづらい。animus はより上位の概念である魂 anima の男性形であり、肉体と区別された心一般を指す言葉で、文脈によって精神とも知性とも意志とも意識とも訳すことができるからだ。つまりこの時点では能力を三区分するにしても、まだ第三の名称も内容も未確定であったことがうかがえるのである。

4. 意志の重視

これら三つの能力の説明にもコメニウスの独自性が現れている。

第三部パンソフィアの序でコメニウスはセネカの「人間に固有の善とは、完全な理性である」という格言を挙げておきながら、「なるほどそうではあるが、すべてではない。というのは、完全な意志と完全な力〔引用者注、実行能力のこと〕が残っているからである」という批判的コメントをわざわざ付けているのだ（2. 247）。

また動物に対する人間の特権を理性と言語能力と作業（ratio, oratio, operatio）の三つだと述べ、こう説明する。

「人間の動物との違いは、理性からよりはむしろ意志から採用されなければならないと考える。理性は意志に、指導者として加えられる。(. . . 中略. . . ）人間と動物の主要な相違は、αὐτεξουσιότης（自己権力）すなわち好きなことを何でも自分の裁量で行う自由（arbitrii libertas）と、そしてすべてを、自分自身すら支配する力が、私たちにあるということである。獣は、運動の自由を有しているとはいえ自由裁量ではなく、欲するままに運動を当てはめているわけではない。その運動は、自然の必要に応じて決定されている。意志ではなく自然の衝動に従って動いているのだ。(2. 550)」

つまり理性はそれ自体がすばらしいのではなく、自由な行動を可能にするために賦与されている。「理性は意志に命令するのではなく、松明を差し出して仕えている。神は人間の目的を、理解するのではなく支配することだと表現した」、だから「人間の頂点は理性ではなく意志にある」と断言する（2. 552-553)。

5. 生得の観念、衝動、実行能力

コメニウスは第三部パンソフィアの始めで人間に共通の生れつきの働きは「知る、欲する、できる（scire, velle, posse）」の三つであり、それらは知性、意志、実行能力から来ると述べて、それらがいかにすべての人に共通であり、生得的であるかを力説するのだが、それに先立って第二部のパンアウギアではこう述べる。

「ところで、魂には次のような傑出した力が備わっているということを、まだ十分に検討していなかった。魂には、知性、意志、活動を有害な誤りから予防する、規範ないしは指針が付け加えられているのである。つまり、真理を追求する知性が偽りによって、善に従う意志が悪によって、作業に向かう実行の力が誤りによって、覆い隠されることのないように、そして、正当な概念、愛好、効果の代わりに、概念、愛好、効果の怪物が生じることのないようにしているのだ。たしかに私たちの精神には、自らの内にある種の生得の指針あるいは生得の光があり、それらに従って考えたことをどれもできるだけ速く決定し、真を偽から識別している。それらはどの人間にも内在しているので、共通観念（communes notitiae）と呼ばれる。また意志にも、自分の指針あるいは秤が、いわばある種の生得の錘があり、善が提示されるとその秤にてらして意志がすぐに駆け寄ったり、悪を避けたりしている。これもまたどの人間にも内在しているので、共通衝動（communes instinctus）と呼ばれる。さらに実行の力にも、活動にうまく適した実行の器官（organa）があり、それによって理解し欲することを何でも巧みに実行できるのである。そしてこれもまたどの人間にも内在しているので、共通能力（communes facultates）と呼ばれるに値する。(1. 86)」

知性、意志、実行能力の指針が、観念、衝動、実行能力というのだから、三番目の能力とその指針には同じ名称が当てられていて、不整合のそしりを免れないが、おそらくふさわしい名称を考えられなかったのであろう。

コメニウスは生得の観念の例として「全体は部分よりも大きい」「２の２倍は４である」「等しいものに等しくないものを加えたら残りは等しくない」など、また「２足す３は５」を挙げている。それらは「観察や経験から集められるものではなく、自然の本性によって何らかの方法で魂に刻み込まれている」が、「もっとも訓練しなければそれが内在しているとは自覚されない」という留保が付けられている [(8)]。

共通の衝動については、個々の願望については人それぞれであり共通性がないように思えるが、悪を避け善を求める衝動は誰にでも共通に備わっていると主張する。根源的な願望、すなわち生きていたい、良くありたい、知りたいなどの願望は誰にも共通で生得的なのだ（1. 297)。そのような生得の願望については、第四部のパンパイデイアで 12 項目にわたって再度説明される（この論文では詳細は割愛せざるをえない）。

6. 実行能力

実行能力についてはパンソフィアでこう説明されている。

人間は何かが「できる」ためには三つの要件がある。「魂の内部の力、それにつけ加えられた外部の器官、その上につけ加えられた自由、そして妨害から救う許可。要するに力と器官と権利あるいは道理だ（1. 300)」。

足がなければ歩けないし、翼がないから人間はそもそも飛ぶことができない。さらに何かができるためにはその機会が提供されていなければならない。つまり、禁止されていればできないし、拘束されていてもできない。だがそもそも心の中でやろうとする意志が働いていなければ何事もできないわけだ。

コメニウスによれば器官の代表は手と舌である。人間には誰にも共通に生れつき器官（手足や舌など）が備わっており、活動する自由が保証されれば、誰もが望ましい活動を行うのに十分なのだ。ただほとんどの人が

それに気づいていないだけなのだとコメニウスは言う（1-300）。

このように実行能力は三部分から成るわけだから、コメニウスが「実行能力」と称する能力は、100 %魂の作用というよりも、手や舌などの人間の外部機関の運動をも包摂するきわめて拡張された概念となっていることが分かる。

このような分類も特異である。通常の考えでは、魂が担当する部分だけを「意志」と呼んでいるのだから。

例えばデカルトは精神と肉体を厳格に区別した上で、精神の能動と受動の関連を考察している。そして意志には「精神そのもののうちに終結する精神の能動」と「身体において終結する能動、たとえば散歩する意志を持って脚が動き歩行がなされる場合」を挙げている（デカルト 2008：21）。このように意志が身体を動かすことを当然ながらデカルトも認めているわけであるが、それに意志と異なる別な能力をわざわざ割り当てたりはしない。だがコメニウスは意志を、善を求め悪を避けるという精神の働きの範囲に止め、それを実際に実行に移す際には「実行能力」と別な能力を充てているのだ。（なるほど人間は善いことと認識し、決意しても、実際に実行には移せないことがたくさんある。だから意志には選択の力だけを割り当て、実行には別な能力を割り当てるのはそれなりに説得力があると言えよう。）

もともとコメニウスには、物事をただ知るために知るという志向は非常に薄い。『大教授学』の中の「どんな知識を教える場合でも、同時に、それを言語で表現し、手で創作すること、つまり実行に移すことを教えてほしい」（J.A.Comenius1658・1958：96）（鈴木 1962：204）、「知るとは、何かを精神で、手で、舌で形づくることができることである」（J.A.Comenius1658：94）という表現に見られるように、実践に移すことができて初めて本物の知識とみなしうるのだ。

コメニウス自身にとっても生得の実行能力という考えは新しいと自身で開陳している。

1641 年頃に執筆したとされる『光の道』をようやく 1668 年に公刊するにあたって新たに献辞を書き加え、この書の執筆以降、七部構成の大著に取り組んだと述べ、そこでの新しい観点をこう説明する。

「あらゆる行動にとって必要な条件として、知る、欲する、できる（SCIRE, VELLE, POSSE）という三種の生来の原理（principia innata）がたしかにすべての人に同じように与えられていることが示されている。つまり、すべての人にすべてを知るための規範（normae）が共に備わっており、それは共通観念と呼ばれる。そしてすべてを望むための刺激があり、それを私たちは共通衝動と名づける。すべてを為すための器官があり、それを共通能力と呼んでさしつかえないだろう。ご覧あれ、ここで新しいのは共通衝動と共通能力の種類である！ これまで哲学者たちは共通観念についてのみ語ってきた。しかしそれらを順序だてて秩序だてた人は一人もいなかった。それらは分散的に折に触れて誰かに述べられるだけだった。私たちは、知恵のこの最初の流れをその固有の泉にもどし、種類に分けるべきだと考えた。そこで私たちは、観念だけでなく、衝動と能力についても、新しく正確に巧みに、目録に掲げようと試みたのである」（J.A.Comenius1668：286）[9]

7. 感覚、理性、信仰

コメニウスの魂の捉え方には大きな特徴のあることが分かった。理性よりも意志を重視すること、さらに第三の実行能力を加えていることであり、一言で言えば理性の力だけを唯一絶対視せずに相対化するという視点である。理性の相対化は別の面からも検討することができる。

コメニウスは人間が対象を捉える、いわば目に相当するものを三つ挙げる。それが感覚と理性と信仰（fides）である。

コメニウスは「事物の像が、光の力によって目に運ばれてくるのには三種類ある」という。直線で運ばれる

場合、反射して運ばれる場合、屈折して運ばれる場合だ（1. 166）。それと同じように、人間も事物を認識する場合、事物を五官で直接感じ取る、精神の内部で理性で内省する、そして「感覚や理性では提供できない多数の事柄を認識」する場合がある。

人間の外部を取り巻いている対象世界を把握するためには、人間はまず五官を働かせる。そして精神の内部に取り入れて理解する働きが理性あるいは知性と呼ばれる。ここまでは古代ギリシャの哲学者から近代のロックやカントに至るまで、まず共通といってよい。ところがコメニウスは、神の啓示は感覚でも理性でもとらえられず、信仰によって把握するというのだ。外部世界を見る目が感覚、人間自身の内部を見つめる目が理性、そして神の言葉が書かれている聖書を読む目が信仰ということになる。

コメニウスは「霊的で永遠な神の啓示」を受け入れるのが信仰であり、「すべての個物を感覚で、すべての普遍物を理性で、すべての啓示を信仰で見通す」と述べているから、信仰が担当するのは神の啓示や聖書といった宗教的事柄だけのように思えるが、信仰が扱うのはそれに限定されずにもっと広い範囲に及んでいるとも見なしうるのだ。

信仰についてコメニウスはこう続ける。

「神の声の証言は、魂の第三の能力とでもいうべきものを私たちに提示している。それを通して、事物がいわば屈折視覚を通すかのように私たちのところにもたらされる。というのは、私たちの感覚や私たちに固有の理性の力の範囲の外には、非常に多くの事柄が存在している（例えば、今のチリ王国に発生したことは平和か戦争か、王は生きているのか病気か、それとも死んだのか。同様にヨーロッパ人には感じることも理性を働かせても分からない事件がある）。私たちにその噂が届いたときに、それらを遠ざけたりその知識を私たちから奪ったりすることのないように、賢明な創造主は、魂に一つの特別な能力を備えさせた。その能力を通して、感覚や理性では提供できない多数のことを認識するのである。それは、他の人々から私たちに語られたすべてを（十分信頼に足ると思える範囲で）嫌がらずに受け入れる傾向性である。それを私たちは信じやすさあるいは信仰と（信ずべき行為を意味するかぎりで）呼ぶ。（1. 168）」

このように、神からの啓示を受け取るだけでなく、他の人間からの報告や伝聞を受け取るのも「fides 信仰」なのであり、この場合の fides は「信用」あるいは「信頼」と訳す方が適切であろう。

このような「信頼」の捉え方を、コメニウスは当初から抱いていたようだ。

最も初期の著作である『開かれた言語の扉』（1631）で「精神」について説明する項目で、理性で正しく把握したものが「知識（Scientia）」であり、そうでないのは誤りや憶測や疑惑であると述べた後に、他人からもたらされたものは「信頼（Fides）」、それがいっそう根拠のある場合は「納得（Persuasio）」さらに証明されていれば「承認（Assensus）」と言うと説明している（J.A.Comenius1631：269）。

この『開かれた言語の扉』は何度か書き直されており、1649 年頃の増補版では「感覚で把握する、それは知るということである。理性で把握する、それは理解するということである。信仰で把握する、それは信じるということである」と端的に説明している（J.A.Comenius 1649：502）。信頼という働きを排除すべきものとして否定的に捉えているわけではないのだ。だから感覚と理性と信仰は、特に宗教的な事柄に限らず認識の三段階として考えられていると解することができよう。

たしかに私たちが自分の感覚や理性を使って直接体験できる事柄は限られている。また私たちが得る情報のほとんどは、自分で見聞したことよりも他からの伝聞（現代であれば書物やマスメディアなど）である。それを一々疑っていたのでは生活できない。おそらく正しいのだろうと「信頼」して正しいと「信用」して実生活に活かしているのである。

もちろんコメニウスは「信仰の実行とは、感覚にとって拒絶されることであっても、理性にとって愚かと思われることであっても、啓示された事柄をすべて信じるということだ。またそのようにして、精神を信仰の光で照らすということだ（2. 520」とも強調しているから、神の啓示は絶対であろう。しかし次のように説明してもいるのである。

「感覚と理性と信仰は互いに助け合うことができるしまたそうせねばならない。もし感覚がどこかで欠けていたり迷ったりしたら、理性か信仰で補われ正されないといけない。また理性に対しては感覚と信仰が、また信仰に対しては理性か感覚が、補い正すのだ。(1. 182)」

例えば、水中の棒が感覚から見れば曲がっているのは、視覚以外の別の感覚や理性が助けねばならない。また「例えば世界の始まりと終わり、世界の外に何があるか、などの問題について」は理性では結論がでないので聖書を信じるしかなく、その場合は信仰の助けを必要とする。「感覚と理性の秤ぬきに何でも聖書からかき集める」のは「狂信的宗教家」である。他人の証言は「感覚と理性で正しく防衛されないと」欺かれてしまうから盲信せず警戒をしないといけない。

プラトンとアリストテレスの時代以来、認識論の大きなテーマは感覚と理性の関連を問うものだった。第三の「信仰」を加える認識論はきわめて異例である。それに、宗教や啓示に関わる問題は、哲学からは分離するのが常であった[10]。

8. 哲学、宗教、政治

人間に固有の能力を知性、意志、実行能力の三つに定めた後で、コメニウスはそれらから哲学、宗教、政治が生じるという。

「真理への熱望から哲学が生じる。それは知恵への熱意である。善への願望から宗教が生まれる。それは最高善の崇拝と享受である。事物を自由裁量で強力に配置しようとする欲求、最大の努力から、政治が生じる。それは、たえず様々なことを考え出す人間を、自らの課題を妨げずに助け合うような秩序へと戻すことである。哲学、宗教、政治、これら三つが人間の三つの最高の本業〔引用者注。わざわざギリシャ語で ’έργα 仕事、と強調している〕である。その他すべてはたんなる副業（πάρεργα）にすぎない。(1. 30)」

では、哲学、宗教、政治の目標は何か。

コメニウスはこう続ける、「哲学は知恵を追求する」「宗教は神の好意を嘆願する」「政治は人間社会の協調を目指す」。人間にとって最も本質的な事柄とは「精神の知恵、心の敬虔、生活の平穏である。これらを追求し、維持し、広めるのが、哲学、宗教、政治である」。そして単刀直入に「哲学、政治、宗教の目的は、平和である」と断言する（1. 36）。

当然のことながら、観念、衝動、実行能力もそれぞれ哲学、宗教、政治に関連づけられている。

「総合的な哲学の要点は、共通の観念を調和へと戻すこと、またすべての人間が利用できるようにすることだ。そうして事物についての憶測によって、私たちがこれ以上意見が一致しないことがないように、すべての本質について同意するようにさせるのだ。

総合的な宗教は、共通の衝動を調整するだろう。すべての個別的な善の間の最高善を眺め回して求めるためだ。そうすれば、私たちは永遠の目標や手段について対立しないようになろう。

総合的な政治は、すべての人間に共通の実行能力を秩序正しく収めるよう努めるだろう。その秩序によって、私たちが熱意や努力について対立せず、誰もが自分の個人的な事柄を平穏に行って、それだけますます公共の平穏を大事にして促進するようになるのだ。(2. 522)」

このような三分割とその対応関係もきわめて異例だといわざるをえない。なぜなら、先に触れたように、そもそもアリストテレスの昔から、人間の学問は理論的・観想的学問（哲学）と実践的学問（倫理学、政治学）に二分されており、政治学に対応するのは意志なのだが、コメニウスでは意志が宗教に対応しているのである。ベーコンも「論理学は知性と理性を論じる。倫理学は意志、欲望、感情を論じる」と、政治学や倫理学を意志に対応させている。それなのに、コメニウスでは意志が宗教に対応し、政治に対応するのが実行能力なのである(11)。

このようにコメニウスは、理性よりも意志を重視し、さらに第三の能力として実行能力を付け加え、それに政治を割り当てている。すなわち、人間の本来の任務は、善を認識するだけでなく善を選び取り、実際に実行することであり、学問を改革するだけでなく、人間社会全体を改革することなのだ。そしてそのためには、感覚と理性だけではなく、「信仰・信頼」にも頼らないといけない。事物の本質を観想し究明するだけがコメニウスの課題ではないのだ。

9. 政治の改革

それではその政治の改革についてコメニウスの主張を概観してみよう。

先に見たように、コメニウスにとって政治の最終目標は「平和」であり、逆に最悪の政治の結果は「戦争」である。第一部パンエゲルシアでは戦争を激しく非難する。

「あの最も忌むべき破滅的な戦争が、人類にどれだけ大きな災難をもたらしていることか。おお、神よ！ほとんど 40 年間、ヨーロッパを不幸に焼き尽くした現在のこの戦争を眺めれば、それはまったく明らかとなろう。戦争によって多くの都市が壊滅し、多くの地域が荒廃し、人々は打ち倒され、繁栄していた国は破壊され、王国全体は廃虚となった。しかもこの狂気はまだ終わっていない。(1. 55)」

1618 年にプラハに端を発した戦争は 30 年間続き、1648 年のウエストファーレン条約後も局地的紛争は収まらず、コメニウスは 1656 年に亡命先のポーランドで戦火に見舞われたのだった。だからコメニウスは 40 年間と言っているのである。

コメニウスは、政治（politia）という語は、ギリシャ語の πόλις から由来しているが、さらに πολέω（歩き回る）という意味を有しているので、国家に限らず「人間が賢明に交際する技術、どのような種類のどのような大きさの人間社会でも、思慮深く統治するための技術」という広い意味を有しているという（2. 509）。だから政治の改革には、各個人、家庭、学校、教会、政治それぞれが改善される必要があるのだ（2. 564)。

パンソフィアの中の「道徳界」では、人間を治める技術が、倫理学、家政学、政治学などに区分されて詳述される。個人の行動を賢明に律する技術が倫理学（ethica）であり、家族を治めるのは家政学（oeconomica)、国家を賢明に統治する技術が政治学（politica）である。すなわち、政治とは、広い意味では人間の交際全般、狭い意味では国家の統治、ということになろう。

コメニウスによれば狭い意味での政治の改革は、各個人や家庭、学校と教会の改革を伴わなければならない。「政治は学校と教会の容器」であり、政治が改革されなければ学校と教会の改革も実を結ばない（2. 658）。

「民の無事安全がどの国家や王国でも最高法規でなければならない」のだから、国家の政治の課題は第一に戦争の除去であり、第二に殺害の禁止である。第三は宗教の改善であり、これは固有には聖職者の課題でもあるが、政治の課題でもある。宗教の破滅は政治をも破滅させるからだ。第四の重要課題は、裁判制度を正義と法に基づいて確立することである。その他、乞食の禁止やいかがわしい飲食店の禁止も政治の役割とされている（2. 637-639)。

10. 平和の法院

各個人や諸国の政治の改革を前提として、コメニウスは国際会議の設立を提案する。

まず学問と宗教と政治の堕落を改善するために、三つの世界会議を設立する。学識者が集まる「光の学院（Collegium Lucis）」と聖職者が集まる「神聖教会会議（Consistorium sanctitatis）」そして政治の権力者が集まる「平和の法院（Dicasterium Pacis）」である。

「平和の」法院という名前がすでに政治集会の目的を現している。

「平和の法院は、どこかの国民が他の国民に対して決起することがないように、あるいは戦争や武器の製造を教える者が出現することのないように、警戒することであろう。また、どこにも剣や槍が残っておらず、いやそれどころか打ち直して鋤や鎌にするのだ。（2. 536）」

コメニウスはここで旧約聖書のイザヤ書２章４節を引用して非武装の世界平和を訴える。

さらにその三つの国際組織の上に、世界総会（Concilium Oecumenicum）がもたれる。コメニウスの構想では、この会議は 10 年ごとに、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカと開催地を順番に選んで開催される。ただし、ヨーロッパ以外の地域との共存ではなく、キリスト教の価値観を共有させるという志向がコメニウスに強いことは否めない。アジア人の中にはすでにキリスト教を知っている者がいるらしいし、中国や日本とも交易がある、アフリカにもキリスト教が普及している、アメリカは最も離れていて人々も粗野だから開催地としては最後になる。そして無宗教者や異教徒がキリスト教に改宗することが目指されている（2. 677）。現在はヨーロッパ内で分裂しているキリスト教会ももちろん統一されねばならない。

振り返ってみれば、コメニウスは幼少期に戦火によって我が家を失い、三十年戦争中は亡命生活を送り、1641 年にイングランドに招待されたものの内戦のために長期滞在がかなわず、亡命先の住まいも焼失するなど、戦争に対する嫌悪は誰よりも激しかった。従って、現実政治に影響を与えないような学問の改革はまったく無意味に思えたのであり、教育や学校の改革も、世界平和実現の手段であった。

このように、コメニウスの世界平和構想は今日の視点からすれば問題が残るものの、彼の世界平和を求める熱意は注目に値すると言えよう。コメニウスはこの構想を公表することができなかったし、おそらく当時もあまり賛成は得られなかったに違いない [(12)]。

コメニウスは今日でもまだ実現していない世界平和が、実現可能だと信じていた。その根拠となっていたのは、彼の人間論、すなわち誰にでも共通に諸能力が生得的に備わっており、それを発現させればよいのだという期待であった（もちろんその発現には教育が不可欠なのだが）。実行能力という他の哲学者には見られない能力を強調したのも、その模索の一環であったといえよう。

注

(1) もっともこの書が岩波の「大教育家文庫」シリーズの一冊として企画されたこともあり、本論は「コメニウスの教育思想」に限定されていた。

(2) 他の例で言えば、例えばベーコンは『大革新』という大著を構想し、それは全六部構成となると予告したのだが、完成したのは二部だけであったし（1620）、デカルトも『哲学原理』が六部構成だと予告しつつ、公刊できたのは四部だけだった（1644）。ちなみにホッブズ（1588-1679）は『市民論』『物体論』『人間論』三部作を完成させることができたが、それは彼が長命だったからではないだろうか。

(3) この発表を準備している最中に、相馬伸一著『ヨハネス・コメニウス』（講談社、2017）が出版された。この書は『熟議』の全体を視野に入れており、今後コメニウス研究が飛躍的に広がることが期待される。

(4) この書には、『熟議』全体の出版に先立って、重要な部分の抄訳（英訳と仏訳）が収録されている。序文はジャン・ピアジェが執筆している。
(5) コメニウスは理性と知性をほとんど同じ意味で使用している。場合によっては理性的働きを精神（mens）で総称している場合もあり、使い分けは文脈による。
(6) ベーコンはこう述べている。「人間の魂の使用と対象に関する知識には二つの部門があり、それらはよく知られており、一般に認められている。つまり論理学と倫理学である。.....論理学は知性と理性を論じる。倫理学は意志、欲望、感情を論じる。一方は決定をうみ、他方は行動をうむ。」（Francis Bacon 1963：614-615）またデカルトも『哲学原理』や『省察』で知性と意志の二分法を採用している。「我々のうちにはただ二つの思惟の様式、即ち知性の認識と意志の働きしかない」（デカルト 1964：70）。このような考え方は当然コメニウスも知っていた。彼はベーコンの『学問の尊厳と進歩』を『熟議』の中で何度も引用している。またデカルトの著作にも通じており、『熟議』では『情念論』に言及している。
(7) 井ノ口淳三訳『世界図絵』では animus は「心」と訳されている。
(8) 私たちはこのような意味での生得観念を、後にジョン・ロック（1632-1704）が徹底的に批判したことを知っている。ロックは主要にはハーバート（Herbert of Cherbury, 1583-1648）の生得観念を槍玉にあげ、なんでも生得原理となってしまうと人々は自分の理性と判断力を使わなくなってしまうと批判している。だから生得原理を信じずに自分の経験を信ぜよというのだ。コメニウスは『熟議』の中で留保付きで何度かハーバートを引用しているから、彼の生得理論から影響を受けていると思われる。ロックは名誉革命後の新しい社会で自分の経験を頼りにすることができたが、コメニウスの周囲の現実は悲観的なことばかりだったから、生得原理に頼るしかなかったといえよう。なお、これまでのところコメニウスとロックの何らかのつながりは確認されていない。
(9) この誰にも共通で生得的な観念、衝動、実行能力という指摘は、出版に当たって書き加えられた献辞で触れられているだけで、『光の道』の本文にはまったく登場しないから、本文執筆後に新たに着想された概念であることは明らかである。
(10) 例えばベーコンは、『学問の進歩』において「人間による学問」を検討した後で「神の啓示による学問」についての検討を申し訳程度に付け足して、「神のことばは、理性が抵抗しても、信じなければならない」と述べている。（ベーコン 1974：356）
(11) 新プラトン主義者のフィチーノが、知性と意志を哲学と宗教に対応させているらしいのだが、詳細は未見である（伊藤 2012：95）。意志の概念をめぐっては意志の自由の問題や理性と意志の関係などについてスコラ哲学の伝統内でも様々な立場があるが、今回は一々言及できなかった。
(12) 例えばデカルトの批判「コメニウスは宗教と啓示された真理を自然の理性的推論によって獲得される諸学問に過度に結び付けたがっている...」（デカルトからホーヘランデ宛の 1638 年 8 月の書簡）（デカルト 2015：27）。コメニウスとデカルトは 1642 年にオランダで会談しており、デカルトはコメニウスのパンソフィアの構想を知らされていたが、その完成には一貫して懐疑的であった。（相馬 2001）参照。

参考文献

伊藤博明（2012）『ルネサンスの神秘思想』講談社（初出 1996）
J.A. コメニウス（1962）『大教授学』鈴木秀勇訳、明治図書
J.A. コメニウス（1988）『世界図絵』井ノ口淳三訳、ミネルヴァ書房
J.A. コメニウス（1995）『世界図絵』井ノ口淳三訳、平凡社
J.A. コメニウス（2015）『パンパイデイア生涯にわたる教育の改善』太田光一訳、東信堂
佐々木秀一（1939）『コメニウス』岩波書店
相馬伸一（2001）『教育思想とデカルト哲学』ミネルヴァ書房
デカルト（1964）『哲学原理』岩波文庫
デカルト（2008）『情念論』岩波文庫
デカルト（2015）『デカルト全著作集』第三巻、知泉書館
ベーコン（1974）『学問の進歩』岩波文庫
Francis Bacon（1963）*De Dignitate et Augmentis Scientiarum*, R. L. Ellis, J. S. Spedding, D. D. Heath ed., The Works of Francis Bacon, Vol. I

J.A.Comenius（1658）*Didactica Magna*, Opera Didactica Omnia, vol. 1, Amsterdam, Praha, 1958, reprint
J.A.Comenius（1658）*Novissima Linguarum Methodus,* ibid
J.A.Comenius（1668）*Via Lucis,* Opera Omnia, Jan Amos Komenský Vol. 14, Praha
J.A.Comenius（1631）*Janua Linguarum Reserata*, Opera Didactica Omnia, vol 1
J.A.Comenius（1649）*Janua Linguarum Reserata*, Opera Didactica Omnia, vol 2
J.A.Comenius（1658）*Orbis Sensualium Pictus*, Opera Omnia Jan Amos Komenský Vol.17, Praha
U.N.E.S.C.O（1957）*Jean Amos Comenius, 1592-1670. Hommage de l'Unesco a l'occasion du trois centieme anniversaire de la publication des Opera Didactica Omnia*

［おおた　こういち／福島大学特任教授／教育学］